

## 『七一雑報』からみた松本伝道

佐野安仁

### 一 松本教会成立の経緯（明治一〇年～一二年）

『七一雑報』（以下『七一』と略称する）が松本平における伝道についての記事を最初に掲載したのは明治一一年四月一九日の三卷一六号においてである。その記事は当時（明治一二年）「美以美教会松本分会出張」として、横浜から松本伝道のために派遣されていた河邨天授の「信州松本ニ福音之種卸シタル人」と題するものであった。それには、「本県下松本南深志四番地之住藤田兵治ナル人明治六年横浜長老教会ニ入テ耶穌之教ヲ崇敬シテ大ヒニ天国之真理ヲ悟リ郷里ニ帰りテ暗昧ニ吟行スル者ヲ天光之下に出サント愛心ヲ起シテヨリ昼夜土人に福音ヲ説諭スル」――ココ二年有り傍聖書ヲ販キ七一雑報ヲ弘メ尽力最も勉タル……とある。藤田兵治については、明治一二年四月一八日の『七一雑報』に「信者の眠りしこと」として彼の永眠が報ぜられている。それによれば、藤田は明治一一年秋より肺病のため病床につき一二年二月一二日に永眠している。彼は、明治六年と推定されるのであるが「横浜に於て長老会教師グリーン氏より洗礼」〔七一〕明治一二年四月一八日）をうけている<sup>1)</sup>。また『七一』の記事から推察すれば、明治八年ころ「古郷へ帰りて神の孤城を守る」ことになる。恐らく松本に福音の種が伝播されたのは、明治八年以降のことだ

田が郷里、松本に帰り聖書や『七一雑報』の販売を通して伝道に着手したことによるといえよう。

ところで明治一年四月二六日と五月三日の『七一雑報』は、前述の藤田に関する記事に加えて「信州松本に道の伝わりし来由」を掲載している。それによれば「昨明治十年二月一五日より横浜元街三丁目住居平民長野儀兵衛なる者の宅に於て夜会を設け金望の信者信陽松代産なる松本惣吾、下平民野崎芳太郎の輩謀りメソヂス教会なる河邨天授開講せるより聴衆毎席三十名に満ち米國教師コルレル氏も亦出席講義せられたり此時惣吾の旧知己なる目今長野県下松本北深志八番丁寄留せる原田弥右工門なる者来会一夜河邨之講議を聞き大ひに感発する処ありて懇談鶉鳴に近し既に弘袖に及びて河邨同氏に語て日貴老の郷里信陽第一の都会ときく哀れ天国の福音を広く聞しめんと欲すと原田點頭して去る……」とあり、「夫より此人古郷に帰り有志の人々数十名を集め再度出港してコルレル氏と共に河邨の来らんことを乞ふされど河邨障まわことありてコルレル氏のみ九月松本に赴き宣教あり此時既に數百名の聴衆あり己後頼りに伝道の者を乞ふによりて本年二月七日河邨横濱を發して松本に至り原田氏を主とし遂に本県土族能勢頼誼岡部豊太郎平民藤田兵治大谷梅吉小林政五郎等の人々と議し開講する……」と松本伝道の端緒が報じられている。

藤田に関する記事とこの『七一』の記事とからいえることは、すでに松本では明治八年以降藤田によって伝道が開始されていたが、明治一〇年九月原田弥右工門の要請でコルレルが、また明治一一年二月河邨天授が来松して本格的な伝道が展開されるに至ったことである。この経緯を『七一』（明治一一年四月一九日）は「……預言者も古郷に於て信ぜラル、コト難キト云ルタトヒノ如く未タ意の如クナラサレドモ同氏（藤田）は金鉄之信者ナレバ勉勵日頃ニ陪シテ益々神ニ祈リ救主ニスガリテ実ニ克ク孤城ヲ守レリ故に真主宰之恵ミ空シカラスシテ米國宣教師コルレル氏此地ニ来レルニ遇ヒ一層ノ信ヲ増シ信者ヲ導クコト甚尽セリ、当春二月川村天授伝道に赴クニ至リテ協力同心シテ共

二道ヲ講ジ……」と記載している。

さて、明治一年、松本伝道は河邨の来援をえて藤田、原田に加えて能勢頼誼、岡部豊太郎、大谷梅吉、小林政五郎らの人々によって展開されることになる。河邨は、まず、松本にて開講する。松本の東町で聖書販売のかたわら伝道を始めていた原田弥右衛門によって開講の場が提供されたものと推定されるが、それが、原田の家であったのかそれとも別の所であったかは明確でない。松本に続いて河邨が着手したのは二月二十五日からの安曇郡巡廻伝道であった。当時、原田弥右衛門は松本分会の聖書販売方<sup>かた</sup>であった。恐らくその仕事の関係上、原田によって伝道地が選定されたのであろう。二五日夜、澁田見耕地の矢口弥重宅にて河邨は創世記（六章より七章）を講義、また二六日には耶穌教大意を、さらに同日内林中耕地の横山喜寿宅にて「但以理書」六章を講じた。二七日は会染村内中之郷耕地の小林政五郎宅にて創世記二章を、さらに常盤村の内須沼耕地太田弥蔵宅にても講義をなし、この巡廻を通じて、七八〇名ほどの聴衆をえた。

その後、八月に至り、『七一雑報』（明治二年八月一六日）は「松本公会近況」として次のような記事を掲載している。「信陽松本北深志八番町旧警察署跡に公会を移し兄弟姉妹協力粉骨して「ソングディスクウル」も八月四日より開校に相成る……」と。ここで問題となる点は八月十六日の『七一』の標記によれば「松本公会」となっており、その公会の移転を報知している。問題は公会として成立したのは、いつ、どこであったかである。『松本教会百年史』（三一ページ）は明治一年の「七月に初代牧師川村天授が派遣された。この時期を松本教会の創立の時と定めることができよう」と記述している。だが、これも推定の域を出ていない。『松本教会百年史』が掲載しているコーレルの「松本伝道に関する報告書」も松本に赴くに至った経緯と松本伝道がいよいよ開始されることになったという記述に

とどまっている。

恐らくコーレルが明治十年十月松本に赴き、また、その翌年の二月河邨が来松し巡廻伝道をした結果に基づき、メソヂストエピスコパル教会は松本公会創設のために改めて河邨を派遣し、初代牧師として任命したものと推定される（明治二年四月一九日の『七一雑報』には、河邨は「美以美教会松本分会出張」と自らの肩書を記している）。それが『松本教会百年史』が推定する明治一一年七月のことと思われる。そして、その公会の場所は聖書販売方であった原田弥右衛門が居住していた松本北深志八番丁と推定されるが明確ではない。

ここでまず、注目すべきことは、この公会の成立が地域信徒の強い要請により横浜から宣教師や日本人伝道師が派遣され、それに地域信徒が協力して開拓伝道に着手し、そこから公会成立に至ったという点である。

第二に注目すべきことは、まず松本に福音を伝播した藤田兵治も、また、コーレルや河邨を松本に招いた原田弥右衛門も共に平民であったことである。そうして、両者共に聖書の販売にたずさわり、宣教師の来援以前に、福音伝播に献身していたことである。藤田は横浜にて明治六年（推定）に受洗し、原田は同じく横浜にて明治一〇年、河邨の講義をきき大いに感発し入信の契機を得、進んで郷里松本で伝道を志すのであるが、この両者を入信に至らせたものは何であつたらうか。

藤田兵治が横浜にて長老教会のグリーンにより受洗した経緯は、前述のように、明確でないが、河邨が『七一』に紹介しているように、藤田は「金鉄之信者」であつたようだ。『七一』（明治二年四月一八日）によれば、「病床にありて尚帝道の人々に勧め……讚美と祈りの声を絶えず……」とあり、巡廻伝道中の宣教師ソーパー (J. Soper) に乞ひ、危篤状態の中で生前晚餐式を守り、また河邨には「我生て耶穌の徒也豈死て偶像に仕ふる野蛮の礼式を受可んや」と

語り、「我肉体を葬に帰し靈魂を神の国に送るの礼式を我にせよ……」と依頼している。明治十二年、松本において「耶穌教の式による埋葬」は最初のことであったと思われる。これは、まさに藤田の篤信を示すものといえよう。

藤田は、前述のように『七一雑報』や聖書の販売にたずさわっていたが、『七一雑報』がどのような経路で彼の手元にとどけられたのであろうか。平信徒伝道の手段として『七一』が利用されていたことは注目すべきことである。地域伝道が、まず平信徒によって『七一』とか聖書の販売によってなされ、活字を通しておこなわれていたことは、特筆すべきことである。また、それをどのような人たちが購入し、どのように読まれていたかに興味をよぶ。

藤田の生業が何であったかは明確でない。彼は、明治十一年、松本公会の仮会堂のために、また安息日学校開始のために、浜範三郎と共に必要とされた金額を献金している（『七一雑報』明治十一年七月二十六日）。松本公会が自給を断行するに至ったのは、大正一五年の三月である。教会創設より五〇年後のことであった。しかし、その間、単に日本メソヂスト教会の伝道局に依存して補助を受けるだけでなく、藤田のように教会運営の費用に当初から責任をもとうとしたことは、注目すべきことであり、彼の厚い信仰の一端をうかがわせる。

原田弥右衛門は後に長沢と改姓する。<sup>(3)</sup>『横浜市各教会小歴史』によれば、原田は「後本姓を長沢と改め聖書販売者となり八十八の高齢を保ち始終偷らざるは此翁なり」とある。『松本教会百年史』によれば、松本に最初に福音を伝えた人は、原田（長沢）であるとされている。彼が宣教師コーレル、牧師河邨天授を松本に招き教会創設に至った経緯からそのように伝えられたのであろう。原田は、松代の出身であった。信州における近代初期の人材は、一般的に「南信では高遠、北信でに松代によって占められている」といわれている。<sup>(4)</sup>それは、これらの地域の人びとが近代初期に、洋学に着目し、それを体得しつつあったこと、また、これらの地域が和算のすぐれた伝統をもって西洋科学を

うけられる素地を形成していたことに起因するとみられている。とりわけ松代は幕末の洋学者佐久間象山の影響もあって進取の気性に富んでいた。これに加えて特筆すべきは、松代は、製糸工場などをいち早く設置し、生糸貿易などで開港地横浜との接触が多く、京浜方面への往来が繁かったことである。<sup>(5)</sup>

『七一』によれば、原田弥右衛門は、松本教会第二代の牧師となった松本総吾の旧知己であり、共に松代の出身であった。原田は平民であった。生業が何であったのか、また横浜に何の目的で出向いたのかについては明確でないが、明治一〇年、横浜の元町で宣教師 I・H・コーレル (I. H. Correll) の、また河邨天授の説教にふれ、キリスト教に関心をもつに至った。

原田は、明治一〇年から主として松本を中心に聖書販売に献身し、一六年には横浜に住み相模、武蔵にて聖書の普及に尽力した。松本総吾は明治一〇年から主として松代を中心に聖書の販売にあたったが、明治一三年、河邨天授のあとをうけて松本教会の二代目牧師となり、その後明治一七年北メソヂスト第一回日本年会(八月)の折、函館に新たな任地を与えられ北海道に渡った。

藤田、原田、松本らによって明治一〇年前後から信州の山村僻地に聖書が販売されはじめたわけであるが、当時、聖書は少なくとも信州の民衆には西洋の書物として稀有のものであった。恐らく彼らは、新しい時代の開化に向けて福音による救済の必要性を訴え、聖書の普及につとめたことであろう。当時、こうした活動の過程には多くの苦難があったとみなければならぬ。その厳しい活動が、とりわけ原田の献身が、素地となつて、明治一〇年に宣教師コーレル、翌年に伝道師河邨が来松することになる。

第三に注目すべきことは、宣教師コーレルと伝道師河邨天授の伝道活動についてである。原田の懇請によって来松

したコーレルは、米国メソヂスト監督教会外国伝道局より中国に派遣された宣教師であったが、夫人の病のため明治六年六月三〇日に横浜に移り、以後日本伝道に従事し、特に横浜、東京西部の連回長老として献身した。

コーレルは、来日早々、横浜山手町二一七番館に集会を開き、八月には不老町の借家に講義所を設けている。これは書籍を施与するための場所として黙許された。やがて元町にも講義所を開き伝道活動を開始した。ここに前述の原田弥右衛門が出席し聴講していた。明治十四年、病気のためコーレルは一時帰国したが、明治一六年二月再び来日し、青山学院の発展に尽力した。コーレルが来松したのは、前述のように明治一〇年一〇月であり、病気のため一時帰国する明治一四年までのほぼ四年間、毎年巡廻伝道に來ている。横浜から「一五〇マイルの道中を殆んど徒歩で氷峠を越えて」、また甲州街道をたどり松本に赴いた。彼は、松本のみでなく松代（明治一二年六月、一二年五月）にも、篠井（明治一二年一〇月、一三年）にも、飯田（明治一三年）にも、長野、埴科郡（明治一三年）にも巡廻して開拓伝道に献身している。また、その間、山形県での伝道にも着手している。福音伝道のため彼が巡廻したその道程をみると、恐らく並みの体力、精神力ではなほしえないほどに厳しいものがあつたと思われる。なお、明治一四年以後、松本を巡廻したのは宣教師ソーパーであつた。

コーレルが米国北部メソヂスト教会の宣教師であつたことから信州松本は、メソヂスト派の伝道拠点となつた。そして河邨天授が明治一一年、松本に派遣され、明治一三年飯田に伝道師として転任するまでの二年間、松本教会初代牧師として献身する。前述のように、二代目牧師（伝道師）として就任した松本総吾は河邨と共に松本教会の創設に尽力していたことから、飯田に転任した河邨とはつねに密接な連絡をもち相互に協力の体制を整えていた。これはメソヂスト派宣教師の指導によるものでもあつた。そこで松本と飯田を結ぶ道程の村々にも両者（河邨と松本）の往来に

より福音が伝播されることになり、塩尻、諏訪、伊那といった要路にも布教活動の拡張をみるに至る。

さて、河邨は名を敬一郎と呼ぶ。天授は号であった。彼は日本メソヂスト横浜教会の礼拝堂であった天安堂(明治八年設立)の近くに設けられた教会立の小学校(天縦学校)の教師であり、また伝道師であった。河邨についてはどこ出身で、いつ、だれから洗礼を領したか明らかでない。彼はまさに開拓伝道者であり、明治一年から一三年まで松本教会の牧師として該地を中心に、続く明治一五年までを飯田教会牧師として飯田を中心に信州の各地を巡廻し福音の伝播に献身した。明治一六年、信州を離れ、東京麻布教会に移った。『平田平三伝』によれば、河邨は俳壇においても相当に有名な人物であった。麻布教会時代、河邨の止宿していた京橋出雲町の松本旅館には、後に飯田教会(明治一七年)、続いて松本教会(明治一九年)の牧師となった平田平三が同宿していた。明治一七年八月二八日に開催された北メソヂスト教会第一回日本年会のとき、河邨は、松本総吾と共に執事であったが、かなりの高齢であったようだ。

河邨の後をうけて松本教会牧師に就任した松本総吾は、明治八年、横浜メソヂスト教会で栗村左衛八と共にR・S・マクレイ(R. S. MacLay)から洗礼をうけた。『平田平三伝』によれば、松本は正式の教育を受けていなかったが、佐久間象山の無言の感化をうけたのか、精進の精神に極めて旺盛であった。当時、翻訳書はほとんど読んでいたようである。明治一二年、松代教会の伝道に尽力し、翌一三年、松本教会の牧師になった。彼は、当時甲府教会牧師であった平岩愼保が紹介した女性を「富士のほか山はなしとぞ思ひけり……」と大いに気に入る、その女性と結婚。明治一七年、臨月のかん子夫人と共に北海道、函館に転任した。なお明治二三年八月、仙台教会牧師に就任した。

『七一雑報』からは、前記の人々の外に能勢頼誼、岡部豊太郎、大谷梅吉、小林政五郎らが福音伝播と教会創設に



協力している。能勢は維新以前、松本藩士であった。彼は文政七年に生れ、通称覚兵衛と呼ばれていた。彼は「天真伝剣法」を發明した剣法の達人であった。彼の入信の動機は明確でない。教会では書記をしていたようであり、『七一雑報』に「松本公会近況」を寄稿している。また、明治一三年三月二六日の『七一雑報』には、能勢は、松本教会の「属長」と記されている。同紙によれば、「能勢氏は一家老幼男女皆授洗の信徒にして該会の為に尽力す……」とある。彼の妻ませは明治一三年二月一〇日、コーレル、河邨らの祈りのうちに永眠した。

岡部豊太郎、小林政五郎については明確でない、大谷梅吉は、教会設立当初『七一雑報』に記事を送付している。書記であったのかもしれない。

さて、これらの人々たちによって松本、安曇野での伝道が明治一〇年から開始されたわけであるが、特に河邨の来援により伝道は本格化した。『七一』の記事によると、河邨が当初用いたテキストは「創世記」である。第一章、第二章により「天地創造」につき、また、第六章、第七章でノアの箱舟の記事について講釈している。とりわけ「男女配偶の始め夫婦一体の理」を説話したようである。それがどのように語られたかは明確ではないが、聴衆の一人で家内の不和に苦悩していた老人は「我家族をして此真理をきかしめよ……」とキリスト教による家族の和を希求したとある。「創世記」の物語による新しい世界が、また、新しい生き方が老人の家庭問題の憂患を解く契機となり、信仰の道が開かれていったことは興味を引く事例である。こうした家族のあり方への覚醒は、個人のあり方、男女夫婦のあり方など、身近な生活における新しい人間の意識、倫理観の思索へと素朴ながらも連動したといえよう。

また、こうした思索は、『七一雑報』（明治九年七月二八日）が報ずる松本での「蟻封社」にみる民権運動の第一声とも無縁ではなかったと推察される。松本公会が開設された明治一一年には、坂崎斌、松沢求策らによって私塾猶興義

塾が、さらに発展して明治一三年には、教員を中心に奨匠社が発足し、自由民権の思想とその運動が展開された。<sup>(8)</sup>この奨匠社の中には、松本教会の会員で聖書の販売に献身していた上條弥治蔵のような信徒もおり、友成貞元の縁者であった友成新太郎（開智小学校教員）もいた。明治一〇年前後に松本でキリスト教と民権運動とが平行して起り、両者が共に時代の変革に新しい意識をもっていたことは、注目すべきことである。そしてこの両者から一つの流れを起したのが木下尚江であり、その木下は明治九年、開智小学校に入学していた。

## 二 創設期の松本教会（明治一一年〜一二年）

さて、明治一一年七月二六日の『七一雑報』によれば、松本公会は、「……会堂新築までのあいだ北深志東街上町にある松本旧警察署に仮会堂を移されました近日より安息日学校も始るといふ噂がありました……」とある。松本警察所は同年七月に北深志六九町に新庁舎を落成し移転した。当時警察署の旧舎にキリスト教の伝道所が移されたことは興味を引く。

(一)安息日学校について。前述の『七一』の記事にみる安息日学校は、「八月四日より開校に相成るに依寄宿生徒も追々申込有……」(『七一』明治一一年八月一六日)と伝えるように、八月にはその活動を開始している。この安息日学校は「寄宿生徒も追々申込有」とあることから、児童を対象とした日曜学校とは異なったものと推定される。安息日学校の開設にあたっては、前述のように藤田兵治、浜範三郎がその入費の一部を寄付しており、また、かつて河邨の教導をうけた横浜メソヂスト教会の天統学校の生徒たちも献金をもって支援している。さらに、天安堂内にあった「美以派神学生修養所」の生徒たちも安息日学校のための書籍を送付して協力している。これらのことは松本公会の能勢

頼誼によって『七一』に伝えられている。なお明治一二年一月三日の『七一』によれば、「米国神学校の生徒より信州松本ソンドースクールの生徒へ学業の進歩を助けんとて波濤万里を隔てし所より河邨天授氏を指て金十二円を贈られました」とあり、松本公会の安息日学校が横浜あるいは米国の神学生らによって物心両面の支援をうけていたことを物語っている。

明治一二年四月二五日の『七一』によれば、この安息日学校は「毎旦五時より素読をなし八時に至る天授氏養子芳三郎氏と二名教育に尽力せり午後二時半より友成藤田の二勸士力を添て教導殊更に勉む」とあり、生徒は四〇名を越えていたようである。これを見る限り松本公会の日曜学校は青年を対象とした私塾的な特色をもっていた。だが、明治一三年河邨が飯田に転任してから、松本公会の安息日学校は低迷したやに推察される。

(二)明治一一年の伝道状況。松本教会は八月、友成貞元と松本忽吾（横浜メソヂスト教会所屬）の二名を伝道見習として選挙し、河邨と三名で伝道にあたることになった。「講釈所も諸方に殖る斗りにて凡そ卅里に連亘せる」と伝道範囲は河邨一人の巡廻では手に余ることになり、前記二名が協力することになった。また、藤田政孝、藤田兵治、浜範三郎、松田友弥、松代の柄沢、塩常、吉田、北邨らも伝道に従事し応援している。

これらの人びとの伝道は、松本、安曇野が中心であったが、松代にも伝道を拡張している。また明治一一年八月には水内郡鬼無里、更科郡信級村からも河邨天授、松本総吾の来訪を乞うに至っている。だが、「当春烈寒を犯して深雪中を奔走せしに付きリョーマチスという風土病之為」に河邨はその地での伝道を果しえなかつた。また前述の藤田兵治は、当時、病床にあり、一〇月二六日には隣善館にて藤田のために祈祷会が開かれている。一一月に至り宣教師ソーパーが松代での巡廻伝道の折に来松し、藤田を見舞い、晚餐式を執行した。これにより会友が共に、「聖霊の慰」

を祈り新たに伝道の意欲をもやしている。なお、松本公会では、ソーパーにより男二名、女八名、小児二名が受洗した。すでにコーレルから洗礼した者を加えると、明治一年松本公会の信徒は六四名に及んでいる。『松本教会百年史』によれば、これらの受洗者の多くは、年齢的には青年層であった。とりわけ、青年を対象とした日曜学校の生徒が多く洗礼を受けたようである。文明開化という変革の時代に、将来への希望を求め、新しい使命を模索しつつあった青年たちが入信を決断したようである。

(三)松代伝道。明治一年の伝道活動中、特筆すべきは松代伝道である。『七一』（明治一年七月二六日）によれば、松代は「信陽旧藩地之巨壁にして人民は風儀厚く近境淫奔な汚習に染ずさずが旧国候家政之余芳に薰陶せる」とあるような土地柄であった。原田弥右衛門、松本総吾が該地の出身であったことから、来松中のコーレルは松代にも赴き伝道に着手することになった。明治一〇年一月のことであった。だが、このとき、コーレルは「子息伝染病に感染」との急報により横浜に帰ることになり、伝道は中断された。そこで明治一年三月、河邨、松本が改めて松代に赴き、紺屋街の北村源之助宅にて講義を開始することになった。これには松本教会の信友、北村虎之助、吉沢常蔵らの周旋尽力があり、また当地の戸長などの協力もあり、三月二二日から二五日まで連日キリスト教の講義が開講された。

河邨、松本の松代伝道のあと、六月五日にコーレルが松代に再度赴き、紺屋街北村源之助宅で講義をしている。さらに一月にはソーパーが松代を巡廻し、当地の士族の招きで数軒に立寄り説教を行なった。このとき北原村、南原村にも招かれ宮田、宮原兩名の自宅でも講義をし福音を伝えることになった。このソーパーの伝道をうけて、松本総吾は松代南原、北原村に「会友の組」を結成し、これを教導するため松代に派遣された。明治一年末か明治二年

当初のことであるが、これにより松代に伝道師が常住することになった。

明治一二年に至り引きつづき河邨、松本らによる松代伝道は势力的に展開されるが、この頃、『七一雑報』（明治一二年四月二五日）によれば、河邨らの伝道活動は「偶像宗の徒」により激しい迫害を受けている。「偶像の徒」は河邨らに対し「電となりてしもがな、世をしゆるねじける人等をうちひしく」と反抗し、これに対し河邨らは「禽獸は共に群を同じふすべからず嗚呼かかる頑愚賤陋輩をして活眼大道の真面目を得せしめずんば豈上帝の道をもって任とするものならんや……」と伝道意欲をかりたてている。

明治一二年二二日、秋田、山形県下の巡廻伝道を終えたコーレルは松代を訪れている。明治一二年五月三十日の『七一雑報』はこれに關し、二月二日には「松代公会へ着になる」とコーレルの到着予定を伝えている。『七一』の記事に、「松代公会」と標記されていることからみると、この一二年の五月までに松代公会が成立したことになる。とすれば、明治一一年末、コーレル、ソーパー、河邨、松本らの松代伝道は、一年足らずして松代の地にメソヂストの教勢を公会成立にまで拡張したことになる。

四明治十二年の伝道。松本教会は松代にまで及ぶ伝道範囲の拡大により友成、藤田を勸士とし、河邨を含めて伝道体制を強化した。すでに、講義所は七ヶ所に拡張され、また五月には「会友の願ひに依て旧松本候城内大名街といえる所へ本会を移しました」（『七一』明治一二年五月三〇日）とあるように、教会にとってよき場所を得ている。

この明治一二年に注目すべきことは、更科郡に伝道所および禁酒会が結成されたこと、飯田伝道が松本教会を中心に展開されつつあったことである。

(四)更科伝道。更科での伝道は明治一一年に開始されていたが、『七一雑報』（明治一二年十月一七日）によれば、その

後松本総吾が、出張伝道をしている。更科の地も伝道には厳しい土地柄であった。この地にも『七一雑報』が販売されておき、これが伝道の前衛的役割を果していた。ここでの有力な信徒は山寺六郎で、彼はときおり説教をしていた。また原昌誠とその家族も熱心に講義所に出席していた。原昌誠は神官であった。

更科では「彌明社」と号する演説会がしばしば開かれ、松本総吾はここで大いに、耶穌教の真理を論じたようである。しかし、「耶穌教信す可からず」との反論がかなり激しかったようである。松本は、これに対し「主曰為義遭迫害者福矣以天国其人者也」と説いた。

また当地の春原幸晟、原昌誠、鹿野□雄らは禁酒会を結成し、松本総吾立合のもとに、その意志を表明している。だが、原、鹿野は入信しなかった。

〔内飯田伝道。『七一雑報』(明治二年二月二十六日)によれば、「信州松本教会にては河村氏をはじめ其他会友の勉勵により此度同国飯田に一つの講義所をひらき又飛弾国にも一ヶ所仮講義を設け同会より一名派出して布教に尽力せらるよし」とある。この飯田講義所開設に至る経緯については、『七一雑報』(明治二年八月二十五日)は次のように報じている。「信州上田の産なる久保某氏は昨年未撰播の間に寄留せしが当五月其郷里に帰られ幣社の今村にまで一書を送られし」とあり、その内容として「着後各子に勧め当今八、九人の信者も出来近頃の安息日に集会と馬太伝を取調候へども同等の浅学にて徒づらに時間を費やし居候処旧前橋士族武田某子只今飯田詰なるが此人先年上田にありし頃同地の会堂への兩三度出席し説教も聞き□福音を一通読みたる信仰あつき仁に御座候此人と□力追々志も相貫ぬき近きうち上田教会の牧子真木氏伝道の為出張の事に相極り日ならず着も之あるべく是全たく神の恩恵と感謝いたし居候同人着の上は市中に於て一つの家を借入れ安息日説教相願たき心願に五坐候……」とある。

この文面にある武田氏とは上田裁判所から飯田に転動した役人で、まだ信者ではなかった。しかし改革派系の上田公会に出席していたことから、真木重遠牧師が一〇月に飯田伝道に招かれることになった。松本公会の河邨が本格的に飯田伝道に着手したのは、明治一三年二月ころからで、改革派の真木による飯田伝道のあとをメソヂスト派が継承することになった。

この改革派とメソヂスト派との協力による伝道は「長埜町」(長野市)の伝道にもみることが出来る。明治一二年一〇月一七日の『七一雑報』には「長埜町に飯島静謙と云人あり氏は東京銀座一致教会の人とか(編集者日此人は盲人にて当年春迄で神戸に旅せし人なり)」とあり、その飯島が長埜町伝道のために上田公会と松代公会に応援を求めていることが掲載されている。上田からは真木重遠が、また、松代からは松本総吾がそれは応じ長埜町に赴いている。

さて以上明治一二年の松本公会の伝道状況をみてきた。公会創設二年にして前述のように松代、更科、飯田、さらに松代から長野へと、つまり北信、中信、南信へとその伝道の範囲は拡大されつつあった。

### 三 飯田、諏訪、池田伝道(明治一三年)

(一) 飯田伝道と河邨天授の転任 松本教会を母胎に明治一二年に成立した松代公会は、一三年以降、北信への伝道拠点として教勢の拡大を計ることになる。つまり、北信への伝道は松代教会が担当することになった。そこで松本教会は主として南信に向けて伝道を展開することになり、とりわけ飯田伝道に主力を注いだ。明治一三年二月一三日の『七一雑報』によれば、河邨敬一郎(天授)は松本より二五里ほど隔る飯田へ赴いている。前述のように飯田伝道は前年一〇月、上田公会の真木重遠の応援により、すでに開始されていた。〔七一〕明治一三年三月五日。

このとき河邨は夫人を同伴した。夫人は飯田で婦女子を対象に讚美歌を教えるなどして婦人伝道者として河邨を助けている。河邨夫妻は、二月の伝道を終え松本に帰えるが、四月に再度、飯田に赴いている。四月の飯田伝道は、松本に来訪中の横浜聖書会社のヨハネ・タムソン (J. Thompson) と同行した。飯田に赴く途中、まず、松本近郊の北栗林耕地、上條某の自宅で講義を、また上林村、岩垂学校にても多くの聴衆を得て伝道を行なっている。『七一雑報』は、これを、「此里ハ洋人ヲ見コト珍敷僻地ナル故ト切支丹宗之説教ト云フ故ニ見物ト聴衆トニテ実に夥シ……」と伝えている。四月一七日、飯田に到着。翌日より九番町の「飯田公会」を応援している。

『七一』(明治一三年六月四日)の記事には、すでに「飯田公会」という名称が用いられている。さらに、六月二五日の『七一雑報』は「飯田教会近況」を掲載している。これから推定すれば、明治一三年五月までに飯田公会は成立していたことになる。

六月二五日の『七一雑報』によれば、五月下旬、河邨はコレル、デレバル(不明)の両宣教師と共に飯田に来ていたが、それは松本教会での伝道の任務を終え、新しく飯田教会での伝道に専念するためであった。一〇月八日の『七一雑報』は、これを、「信州松代地方に伝道せられし松本総吾氏は松本に又松本の伝道者川村天授氏〔マツラ〕は飯田に転任せらる其ゆる松代地方の伝道者として横浜巡回伝道者鈴木信太羅氏該地に赴かれたり」と伝えている。

河邨は飯田教会着任(五月下旬)当時、持病の「リュウマチス」を患っており、松本教会の会員一名が飯田まで付添っていった。河邨を迎えた飯田教会は六月、男二名女三名が受洗し、それらの人たちにより仮会堂の設置、日曜普通学校の開設が計画された。また、その学校では和漢洋普通学と神学とを教導することになり、そのために伝道師を迎えることにした。七月下旬には築地神学校から須御緑蔵が飯田に來援している。



さて、河邨を飯田に送った松本教会は、松本総吾を二代目の牧師として迎えた。松本は河邨在任中開拓した伝道地域の責任を負うことになった。その一地区は、河邨が飯田に赴く途中に開拓した松本近郊北栗村であり、またもう一つは、北安曇郡池田町であった。北栗村には、旧大庄屋で学校教員でもあった上條某氏が尽力していた。上條は生徒を能く導き、「晩近上帝道を以て人を教導し」、また河邨在任中は（一三年三月）、河邨夫妻を招き諸方で講義を開いていた。

他方、北安曇郡池田町では塩原（某）、浅原慈朗の二氏に加えて数名の信徒が河邨を招いて毎月三回の集会を開いていた。これらの地域を松本が巡廻することになったが、河邨は飯田に転任後も、しばしば松本と共にこれらの地に招かれ、伝道している。

(二) 諏訪伝道。ところで明治一三年特筆すべきことは、上田公会、松本公会、飯田公会の三公会による諏訪伝道である。『七一雑報』（明治一三年八月二〇日）によれば、まず、諏訪伝道は留川一路、古澤久治、真木重遠の三名によって開始された。この三名は上田公会の関係者であった。彼らは一三年七月二四日に上諏訪に赴き、布教することになったが、前記『七一』によれば、「該地は是まで誰も基督教を布たる者なき故に（或ひは誰人が一二度講せし人もありとか）土地の人は聖教のなにもたるを知らず其他種々の事故ありて何分願ふ如くならず……」とある。というのは、講義所とすべき適当な家が借用できず、そのために彼らの滞在費も一夜の宿泊費に五〇銭の支出を要し、長期滞在の見込がたななかった。そこで彼らは「一度の講義をも試みず空しく帰るは遺憾なり」と七月二九日に宿泊所にて講義をなし、五〇〇名の聴衆をえた。真木は該地に留ることのできない事情もあり、三〇日に諏訪を離れたが、留川、古澤の二氏が残り布教にとめることになった。

その頃、『七一雑報』（明治二三年一月五日）によれば、かつて松本大名町の講義所にて河邨の講義を聞き、また松本教会の藤田政孝と旧知己であった浅野、宮坂の二名が諏訪に在住していた。四月、「北英国聖書会社」のタムソンが上諏訪を通行のとき、それに同行していた山梨県桜町公会の田中に浅野、宮坂の二氏は河邨の諏訪来援を懇請した。しかし河邨はその時、飯田にて巡廻伝道中であり、その懇請に応じえなかった。そこで六月、コーレル、デレパルの両宣教師が諏訪に赴くことになったが、これもデレパルの病気で実現できなかった。こうした事情から松本教会の会友で当時諏訪に在勤していた小笠原泰賢が改めて河邨の来援をタムソンに要請した。これによりタムソンが再度、諏訪に赴くことになり、横浜より兩宮と神学生の平田平三、山鹿旗之進が同行し、飯田より河邨が、松本教会からは藤田政孝が八月下旬にそれぞれ諏訪に結集した。

彼らは、旅館大林屋楼上にて開講、兩宮、河邨、タムソンが講義をし、タムソンの通訳には高垣が当った。聴衆は三、四〇〇名で、そのうち九名が大いに感激し入信を決意したようである。こうした事情から小笠原は諏訪に仮講義所の開設を河邨に乞い、巡廻を要請した。だが、河邨が「巡回所多き」との理由で辞退したことから、宮坂の自宅を仮講義所とし、毎月、松本教会と飯田教会とが交互に出張伝道することになった。こうして明治一三年八月、諏訪伝道の拠点がすえられることになった。『日本伝道百年史』によれば、この年、バラも諏訪に来ている。

真木重遠、古沢久治、留川一路らの上田教会の関係者によって着手された諏訪伝道が、河邨らによる松本、飯田両教会の伝道に継承されたことになる。古沢はこの年（明治一三年）の末、「レフォムド・ミッションよりの依頼により信州より帰京東海道三島へ伝道されし由」と『七一雑報』（明治一三年二月三日）が伝えるように、信州を去り、また、真木も、上田教会の牧師を「如何る故にや今後辞職し更にレフォムド・ミッションの伝道者となり回国の一地方

に於て専ら尽力せらるゝ事になりし」と伝えられている。真木は『七一』（明治一五年二月一日）によればこの一三年末より一五年にかけて、信州小諸の伝道に献身している。留川一路は信州高遠の伝道に赴いている。高遠では、この土地出身北原文司が東京より帰省した折、福音を伝播していた。また明治一三年の『七一』によれば、高遠の士族はこのころ「積善会」と称する禁酒会を結成していた。幹事は内藤頼言、会計は中村郡司であった。なお明治一二年には築地一致神学校の篠原氏が高遠伝道を行なっている。（『七一雑報』明治一二年七月一日）。

(三)池田伝道。松本教会は上諏訪伝道の直後、前述の池田町にタムソン、河邨らを迎えて伝道を展開している。池田町には河邨によって教導された浅原慈朗、勝山末吉が松本公会附属の活版所を開き聖書類の印刷を計画していた。彼らはまた聖書販売にも尽力していた。タムソンらが諏訪伝道を終て来松したとき、この池田にも招かれることになり、河邨、松本が同行し活版所にて伝道集会が開かれた。高垣もタムソンの通訳として同伴している。

池田町の活版所では「真道衡平、訓點旧約創世記引合」などの出版が予定されており、これらの仕事には浅原、勝山が職工として従事していた。

(四)北信伝道。諏訪、池田伝道に加えて、松本公会は、この年、長野、埴科郡倉科村においても福音を伝播している。『七一』（明治一三年六月三日）によれば、コーレル、デレパルの両宣教師が四月来松の折、松本総吾と共に長野に赴き、名越某の自宅で開講している。その後、名越の自宅では毎金曜日集会が開かれるようになった。また、彼らは埴科郡倉科村にも出向き講義をしている。「該村は西洋人を見る稀なれば多くは見物人の様なれども其うち四、五名は大にこれまでの空を信ぜしを悔る色あり」と『七一』は伝えている。

この年、コーレル、デレパル、タムソンの他に、メソヂスト教会のハリス(M. C. Harris)宣教師が松本教会を十月

中旬に、飯田公会を十月下旬に巡廻している。

#### 四 明治一四年から一六年までの伝道

明治一四年の『七一雑報』には松本公会に関する記事は少ない。四月二十九日の『七一』に、松本教会が「長州豊浦の唾児」へ三円二五銭を送ったことが伝えられている以外には、特記すべきことはない。

(一)木曾伝道。明治一五年に至り、松本教会は一月一日より二週間にわたって木曾伝道を行なっている。『七一』(明治一五年二月三日)によれば、「松本総吾は木曾山中なる本田並びに藪原、福島辺へ播種のため六月十四日より凡二週間の見込にて発足せられる由」とある。この木曾伝道については、その後あまり報ぜられていない。

(二)伊那高遠伝道。五月二六日、松本教会はソーパー宣教師を迎えて基督教説教会を開催しているが、その直前、伊那高遠伝道が松本教会の会友およびソーパーによって展開されている。

まず、高遠伝道についてであるが、前述のように旧内藤侯の城下であり高遠では明治一三年、北村文司、留川一路によって福音が伝えられ、また内藤頼言らによる禁酒会が結成されていた。しかしその後、伝道活動は中断されていた。そこで松本教会の聖書販売方の上條弥治蔵、中沢一治の両名が一五年の五月に聖書の販売のためにこの地に赴くことになり、伝道が再び開始されることになった。

『七一雑報』(明治一五年六月三日)によれば、「兼て華族内藤侯の令弟頼言君は大に道に志し該地の有志を集禁酒会を開れ居かば今般両氏―上條、中沢―来れしを幸に去月(五月)一三日夜同君諸共基督教説教会を開れたるに聴衆凡二百余名ありし」とある。このころ高遠では「羅馬教の仏人某及伝道士飯沼某」の説教や、「儒教を拡めんとする

貫名海雲」なる人物の説教、真宗の僧侶の説教が相継いで行なわれていた。

上條、中沢によりこのとき二千余りの聖書が販売されたようである。上條は説教会後、飯田に向い、飯田に巡廻中のソーパーと同道して再度、高遠に至り説教をなし、五月二四日、松本にソーパーを同道して向った。その途中、塩尻に近い小野小学校で説教をし、聖書を教員に販売し、さらに二五日には村井小学校（松本の近郊）にて演説をし、松本に至っている。中沢は先に松本にもどり、ソーパーの来松を待った。中沢の妻は、このときソーパーより洗礼をうけた。

ソーパーを迎えた松本教会は基督教説教会を開催。これについて『七一』（明治一五年六月一六日）は、あらまし次のように伝えている。五月二六日、松本田毎楼において説教会を開催。弁士は上條恭敬（軽重論）、松本総吾（播者は刈る）、ソーパー（真の開花）、で、午後八時より開始。聴衆は一五〇名であった。翌二七日は仮会堂にて午後二時より禁酒会を開催。会主は、この地方に名ある鯨飲家上條弥治蔵にて、ソーパー、松本、河原、宮島の諸氏が演説。出席者六〇名。同八時より田毎楼にて説教会。松本が「開会の旨意」、中沢一治が「靈魂病の妙薬」、宮島退三が「愛隣の説」、ソーパーが「悔改の説」と題してそれぞれ演説を行なった。二八日の安息日にはソーパーより男一人、女三人児童三人が受洗。二九日には松本、ソーパーの両氏が氷室村の中野文郁の自宅にて説教、ソーパーより女一人が受洗、三〇日ソーパーは松代に向け出立した。

ところで、高遠伝道は、この年一月にも行なわれている。『七一雑報』（明治一五年二月八日）によれば、「上伊奈郡高遠町には既に七、八名の有志者ありて仮説教所を設け飯田、松本両会より毎月伝道師を招きて聖書を研究さるゝ事なるが去る（十一月）十四日飯田の上條氏此地に説教せしに二十余名の聴衆熱心に道を聞たりし」とある。また、同

郡の小河内にも、松本教会の松本と飯田教会の上條とが伝道に赴き仮講義所を設けるほどに至った。

この頃、下伊那郡神稲村にも「信東会」と称する基督教の研究会が結成されている。この会は「伝道士の河本氏と豪農大原氏の催すところ」と『七一』は伝えている。

伊那高遠の伝道は明治一六年も松本、飯田の両教会により継続されている。一〇月上旬、飯田教会を応援のために赴いた松本教会の松本は五日間の説教を終えた帰途、高遠に立寄り、飯田教会の聖書販売方吉澤勇七と共に三日間、説教を行なっている。前述の北原文司も帰省の折には集会を開き伝道に尽力していたようだ。

こうした伊那高遠伝道により同郡坂下町の県会議員中村(某)も福音に感化され、伝道者の来訪を歓迎し、同町にも集会が開かれるようになった。坂下町での最初の集会は、明治一六年一〇月一〇日のことで、内山(某)の自宅で松本総吾が説教をしている。このとき、松本は、中村の招きでこの町に赴いた。坂下町は松本地方と飯田地方を往来する要路であり、この町も伝道の一拠点となった。

さて、以上、明治一六年までの松本教会の伝道活動の歩みをみた。河邨から松本へと継承された松本教会は、明治一七年、松本総吾の函館への転任により、中沢一治が三代牧師として着任した。中沢は松本教会に二年間在任し明治一九年、愛知県の田原に転任し、明治一九年に、飯田教会牧師であった平田平三が四代目の牧師として着任する。平田の在任期は明治二三年までの五年間であったが、この期間に松本教会は、内部の充実と共に新たな進展をみることになる。

## 五 松本教会における伝道の特色

松本教会の歩みを明治一六年まで『七一雑報』の記事によってたどってきたのであるが、その記事から松本教会の伝道を特色づけるとすれば、次のようなことがいえそうである。

まず第一に、伝道活動の前衛として聖書販売がなされたことである。松本教会に所属した聖書販売方は明治一一年以来原田弥右衛門が担当し、教会創設当初には松本総吾もこれに従事していた。またそれ以前は藤田兵治が独自にこの仕事を行っていた。『福音新報』（明治一六年一月二〇日）によれば、明治一六年には、中沢一治、原田弥右工門、小沢太代吉、平林の四名となっている。明治一二年には大谷梅吉が、一三年には上條弥治郎、浅原慈朗、勝山末吉が協力している。一五年に至り中沢一治、小沢太代吉の両氏が聖書販売方として長野、飯田まで伝道を兼ね出向している。一六年には、中沢は越後蒲原郡へ、原田は横浜にあつて相模武蔵の両国へ、小沢と平林よりは北安曇郡へと出向いている。また飯田には吉沢勇七がその任に當っていた。彼らにとって聖書の販売は、福音の宣教をも意味した。それだけに彼らには厳しい迫害と多くの困難が伴った。

聖書は農村においては主として地主階層に、また学校の教員に販売されたようであるが、飯田では、呉服業、染物業、印刷業など商人、職人層にも普及したようである。また松代においても職人層が聖書を購読し、信者となっている。<sup>(1)</sup>「文明開化の風潮の中で洋風にならなければ開化の人といわれぬというので聖書を持って信者らしい顔をして歩いた人もいた」<sup>(2)</sup>ようである。この聖書販売と関連して明治一三年に開設された池田町の活版所の出版事業も看過できない重要な役割をになっていた。つまり、「活字」により、まず異国宗教浸透の素地が形成されつゝあつたとみると

き、聖書の販売とそれに関する出版事業は、伝道活動にとって前衛的に重要な役割をになっていたといえよう。

第二は、福音伝道の前衛としての聖書販売と併行して、あるいはその後を追って宣教師や伝道師が巡廻していることである。とりわけメソヂスト系教会成立のパターンには、聖書販売の担当者や宣教師、伝道師との連携体制が確立していたようである。また、「聖書売捌所」が教会となり、伝道の拠点となっている。

さて、明治一六年までに来松した宣教師は、コーレル、ソーパー、デルパル、タムソン、ハリスの五名で、とりわけコーレル、ソーパーの信州伝道には特筆すべきものがある。明治一六年、メソヂストの日本伝道の陣営をみると、R・S・マクレーが総理でありI・H・コーレルが東京東部連回長老司であった。この連回には築地、神田、常総、天童、山形、盛岡が属していた。東京西部連回長老司はJ・ソーパーで、その下に麻布、松代、松本、飯田があった。明治一四年まではコーレルが東京西部を担当し、その後ソーパーが担当している。伝道師(牧師)は、河邨天授から松本総吾に継承され、勸士は藤田政孝、友成貞元であった。河邨、松本はつねに宣教師と共に、あるいは単独で山間僻地にまで伝道に赴いている。とりわけ河邨はリニューマチという病に苦しみながらの伝道であった。その伝道の範囲は、かなり広範囲で単に松本近郊にとどまらず、埴科郡、松代、更科郡、長野町といった信州北部から安曇の池田、東筑摩郡の北栗、上林、岩垂、村井などの中部にかけて、また、小野から飯田に至る坂下、高遠などの伊那谷、さらに木曾路や甲州街道に至る諏訪など南部一帯にわたっている。

こうした広範囲の伝道によって、まず、明治一二年に松代教会が、明治一三年に飯田教会や、篠の井駅更科教会(「七一」明治一三年二月一三日)が成立している。明治一三年までに松本を中心に北は松代、南は飯田に教会が成立したことから、松代、松本、飯田を結ぶ要路に講義所が開設されることになり、伊那高遠などにも伝道の拠点が拡張さ



れていった。また、諏訪伝道にみるように、松本教会の会友が各地に転出し、その地に河邨などの伝道師を招いて集会を継続することで、福音は各地に伝播されている。

これらの伝道活動は、前述のようにメソヂスト派の伝道体制によるもので、信州はコーレル、ソーパターの両宣教師と河邨、松本の両伝道師（牧師）を主軸に展開されており、明治一三年以降は、松代教会（伝道者鈴木信夫羅）、松本教会（牧師松本総吾）、飯田教会（牧師河邨天授）からなる三教会の一体的な協力体制で展開されている。諏訪伝道、高遠伝道は松本、飯田の両教会の交互の伝道で遂行されており、松代地域を含む北部の伝道は松代と松本の両教会の協力で展開されている。

明治一七年、北メソヂスト教会第一回日本年会（八月）が開催された当時、河邨天授は東京麻布に、松本総吾は函館に転任しており、すでに信州を離れていた。彼らの後任として、松本教会には中沢一治が、松代教会には山田寅之助が、飯田教会には平田平三が、高遠教会には大貫文七が就任し、信州伝道の拠点は四ヶ所となった。<sup>14</sup>

さらに明治一九年、松本には平田平三が、松代、長野には大竹常業が、飯田には工藤達申が、高遠、坂下には大貫文七が、梓村には小沢太代吉がそれぞれ就任している。<sup>15</sup>メソヂスト教派の伝道拠点は、この明治一九年には五カ所になっている。

さて、第三の特色は、以上のような広域にわたる伝道体制のために、松本教会内部の体制の確立がおくれたことである。河邨、松本の両牧師は、巡廻伝道に赴くことが多く、教会内の体制充実に集中するまでには至らなかった。明治一六年当時、会員は四七名をかぞえたが、松本教会は明治二三年まで会堂を新築できなかった。明治一一年に旧警察署を仮会堂としたが、明治一二年に旧松本侯城内大名街に移り、さらに明治一五年には捨堀町へ、明治一六年には

小柳町の大久保(某)の家を借用して教会とし、明治一九年には新町の松崎尚信の家に移っている。会堂と牧師館が建築されたのは明治二三年のことで、ようやく小柳町九五八番町に落着くことができた。また、自給体制が確立されたのは大正一五年のことで、伝道開始より五〇年ほど後のことであった。

これは、上田教会(明治九年創設)が明治一七年に会堂を建築し、創立以来一二年後の明治二一年に自給独立の教会となったのと比較すると、教派のちがいはあったとはいえ、体制確立にやや立後れを感じず。だがそれは、明治一〇年代の松本教会は、内部の体制に目を向けるよりも、伝道の拠点としてつねに外に目を向けて広く福音の伝播にその使命を負っていたことに原因するとみるべきであろう。

松本教会が内部充実の緒については、明治一九年、平田平三が第四代牧師として就任したときである。平田の前任者であった中沢一治は、松本総吾のあとをうけ二年間牧会を担当した。中沢は伝道に熱心であったが、伝道上に必要な神学的準備が十分でなく、したがって指導性も十分に発揮できなかった。中沢は、明治一九年に愛知県の田原に転任した。<sup>17)</sup>

平田は、松本において漢学や英語のできる牧師として、また政談演説のできる牧師として評判を高めていた。平田もと子夫人は松本に始めて洋髪を紹介したり、編物を若い婦人たちに教えたりして文化的な側面から平田に協力していた。こうした平田夫妻の松本伝道は、地域住民との結びつきを得て、教勢の拡大をみた。

特色の第四は、明治一〇年以來の伝道の結果として、各地に禁酒会が結成されたことである。松本、松代、飯田、伊那にそれぞれ禁酒会が生まれている。当時、欧化思想の一つの窓口として聖書を読み、また説教を聞く者はいた。しかし、それらの人たちがすべて信者になったわけではない。伝道による成果は、受け手の生活の変革によってみる

ことになる。つまり、福音の真理が、いかに受け手の生活に受肉するかである。その受肉の一形態が、禁酒という倫理的な姿をもって示されている。例えば、鯨飲家上條弥治蔵は禁酒会の会主となり、聖書の販売に従事するに至る。

つぎに『七一雑報』によれば、多くの教員が聖書を購入しており、また、教員が松本での民権運動の中心となっていたことから、聖書と民権運動との関係は全くなかったのであるうか、という問題である。そこに密接な関係が指摘できれば、聖書を通じての受肉の形態として自由民権運動をあげることができる。とりわけ松本教会の安息日学校は、青年を対象として開校され、私塾的な性格を備えていた。また、青年演説会を（明治一五年一〇月三日）開催し、青年への教化浸透を試みているが、その演説会の演題には「真の開化」（ソープル）などがあり、時代の風潮と共にキリスト教が論ぜられている。安息日学校の生徒にも当然、時代の意識があったとみるべきで、それは明治一年の松沢求策、坂崎斌らによる猶興義塾の民権運動と無縁ではなかったと推察される。

前述のようにキリスト教伝道と民権運動とが、松本ではほぼ時期を同じくして行なわれており、キリスト教が伝播された各地には、明治一二年ころより民権運動の結社が組織された。例えば、池田町村には自然社が、豊科村には同盟社が、穂高には友愛社がそれぞれ結成され、討論会、演説会、夜学会が開かれていた。これらの結社による集会和河原らによるキリスト教の伝道集会とが、当時、どのように意識しあっていたかである。

当時、地方におけるキリスト教の説教といえば放蕩息子、種蒔きや、ガリラヤの漁夫などの聖書の比喻を講談調に演ずる場合が多かったようである。そのような説教と民権運動とはあまり接点をもたない。ところが平田平三は、明治一五年の飯田での夏期伝道の際に「民権議院開設と民権の伸長」と題して演説をしている。宗教体験を重じ、「聖霊の内在」と「聖霊の証」と「聖霊の祐導」とに活きる教会を強調するメソヂスト派の伝道からみれば、平田は特異

な存在であった。しかし、彼は飯田においても、松本においても評判の人物で、彼の説教には人が集った。明治二〇年代の後半、松本教会の会員、降旗元太郎、木下尚江は共に社会運動に参与しており、降旗は「特別地価修正」の反対運動に（明治二四年）に、木下は「松本米穀取引所設置運動」（明治二七年）にそれぞれ参加している。こうした二〇年代の松本教会々友の動向をみると、その素地が一〇年代に形成されつつあったとすれば、松本におけるキリスト教の伝道と民権運動とは少なくとも意識しあう関係にあったといえよう。上條弥治蔵の例がこれを物語っている。

第五の特色は、松本教会を中心にメソヂスト派が伝道の拠点とした場所が、いずれも、城下町であり、また、「生糸出荷の要衝」であったということである。改革派によって開始された上田も、メソヂスト派によって伝道拠点とされた松本、松代、飯田、高遠のいずれも旧城下町であり、また、明治一一年には生糸の出荷にかなりの実績をあげている。<sup>(19)</sup>これに対して善光寺の門前町であった長野はキリスト教の布教に立ちおかれている。

上田では、旧上田藩士族の鈴木親長が明治五年蚕種業者として上京し、明治七年にタムソンから受洗している。稲垣信らによって明治九年に創設された上田教会の中心的な信徒は士族であったと推定される。鈴木親長のように蚕種業者となり職種の明確なものもあるが、その他の信徒の営みがなんであったかは明確でない。

松本教会も当初信徒の中心は旧士族であった。ただし藤田兵治、原田弥右衛門、松本総吾については明確でないが、三者共に横浜でキリスト教に接している。松本も城下町であり、製糸業は盛んであった。特に機械系の生産量が多かった。しかし、製糸業とキリスト教との関係を例証する事実はみあたらない。

松代教会も城下町であり、士族教會的であった。製糸業は松本と同様に盛んであり、手取糸の生産量は松本よりも高かった。松代教会において注目すべきは、養蚕農家や職人層との結びつきがみられることである。

飯田教会も上田、松本、松代と同様な性格をもっているが、ここでは製糸工場を自営していた豪商長谷川範七や、豪農宮沢秀実らの力により女工をはじめ呉服業、染物業など商人、職人層との結びつきにより信徒層に中がみられる。<sup>(20)</sup>

高遠教会も内藤頼言らを中心に旧士族が指導的であった。もちろん製糸および養蚕も盛んであった。

このようにみると信徒層の中心は、いずれの教会も士族であったといえる。その信徒が養蚕、製糸業にどれだけ関係していたかは明確でない。しかし、前述の地域には生糸の出荷、輸出の関係で横浜に向く者は多かった。そして、横浜でキリスト教に接する者もいた。だが横浜に向く立場にあった者は、資本力をもった自営製糸業者であり、養蚕農家をとりしきる業者であった。そのような彼らにキリスト教との接触の機会があったことは十分に推測できる。信州の製糸業の要衝に教会の創設をみると、キリスト教と製糸業との関係は興味ある問題ではある。しかしその諸教会が、果して養蚕農家や商工層にまで深く福音を伝え得たか。信州の場合、地域での商工、農民層への結びつきは十分ではなかったようである。聖書販売にしても、この点が問題となる。松代教会や、飯田教会には職人層への結びつきが比較的によくみられる。これは注目に値するが全般的に地域産業とキリスト教との関係はそれほど密接ではない。だが、製糸業の指導的立場にあった者たちと、自由民権運動との関係は密接であった。<sup>(21)</sup>

以上、松本教会を中心に創設期から基礎確立期までを『七一雑報』の記事によって考察したのであるが、諸教会信徒層の分析は、さらに言及すべき課題とする。

- (1) 横浜長老教会（指路教会）は、明治七年七月、宣教師ヘンリー・ルミスがヘボンの施療所内で一〇名の日本人青年に洗礼をさずけたことに端を発して、同年九月に成立する。このとき受洗した青年たちは、ヘボン邸内に設けられた英語塾の生徒であり、その塾の教師にD・M・グリーンがいた。また明治七年九月にはD・C・グリーンが新約聖書の翻訳のために横浜に赴き、九月に松山高吉と共に太田町に講義所を設けている。さらに東京芝罘月町教会にはクリエンがいた。藤田が洗礼をうけた牧師とは長老教会の牧師であったことから、恐らく、グリーンではなかったかと推定される。そのように考えると、横浜にてということに疑問が残る。
- (2) 日本基督教団松本教会『山にむかいて目をあげる』によれば、明治九年、松代の長沢弥左衛門が松本に始めてキリスト教を伝えたこととある。藤田は長沢の松本伝道以前に福音の布教を開始したことになる。その長沢弥左衛門は原田弥右衛門同一人物である。なお『長野県政史』によれば松本でのキリスト教伝道の開始は明治九年となっている。
- (3) 『横浜市各教会小歴史』（横浜市宣教五十年記念）十三ページ。
- (4) 『日本新教育百年史』（5）「中部」（玉川大学出版部、昭和四四年）三一九ページ。
- (5) 古島敏雄監修『長野県政史』第一巻（第一法規出版株式会社、昭和四六年）二九四ページ。
- (6) 田中亀之助著『平田平三伝』（基督教出版社、昭和十三年、四四ページ）。
- (7) 同書七三ページ。
- (8) 松本での民権運動といえば、猶興義塾、奨匠社に、その起源をみるが、明治九年七月の『七一雑報』は「……松本にて蟻封社という民権を主張する社がたち学者先生たちが毎月一度づつ集会して談議をなす」と伝えている。
- (9) 『平田平三伝』には、これに関連した記事はない。平田が信州に来たのは明治一五年の夏で、飯田、高遠への夏期伝道のためであった。だが神学生時代毎夏地方に出て伝道に尽力していたようでもある。したがって、一三年にもすでに信州に来たとも推定される。
- (10) 小沢大代吉と平林ようは松本教会で松本総書の司式により明治一六年一月八日に結婚している（『七一』明治一六年二月二日）。平林は婦人伝道師として明治一五年仙台に赴任。
- (11) 古島敏雄監修『長野県政史』第一巻 二九五ページ。
- (12) 同書二九五ページ。

- (13) 田中亀之助著『平田平三伝』四二ページ。
- (14) 同書六五ページ。
- (15) 同書七一ページ。
- (16) 『松本教会百年史』(四〇ページ)によれば、明治一六年  
会員四七名、求道者五名、平均出席三〇名、となっている。
- (17) 田中亀之助著『平田平三伝』七五ページ。
- (18) 平野義太郎編著『中村太八郎伝』二章参照。
- (19) 矢木明夫著『日本近代製糸業の成立』一五ページ、七ペ  
ージ参照、この問題については『日本基督教団富士見高原教  
会 教会史』(一一一―一三ページ)においても言及されている。
- (20) 『七一雑報』明治一三年一月二十四日 一四年六月一七  
日参照。
- (21) 『東筑摩郡松本市塩尻市誌』(別篇人名)によれば製糸業  
の開拓者が民権運動の推進役となっている。